

All you need is love
愛こそはすべて

All you need is love
愛こそはすべて

Love is all you need
その他はなにもいらぬよ——

おぼつかない異国語で、少年は覚えたての唄を口ずさむ。彼を運ぶ傷ひとつない自転車は、滑るように畦道を走っていく。心地よい暖かな風からは自然のにおい。顔に桜のかけらが当たってくるけど、お構いなしさ。力いっぱい、ペダルを踏みこもう。

突き抜けるような青空の下。燦々ときらめく太陽に追い付け、追い抜け。鼻歌のひとつでも歌いたくなるような、そんな一日。

この唄の「愛」って、今日みたいな、こんな感じのモノなのか。まだ彼にはよく分からないけれど、不思議とそう思えてくる。またひとつ大人になれた気がして、ますますご機嫌になって。

「——おや、なつかしい唄だ」

突然の声に、彼は慌てて急ブレーキをかけた。けたたましく車輪が悲鳴を上げ、自転車は止まった。

しまった。上機嫌になりすぎて、鼻歌のつもりが他人に聞こえてしまったのかな。頬を赤らめながら声の主の方を向く

と、そこにはひとりの老人が立っていた。

「おっと、呼び止めてすまないね。私も若い頃その唄が好きでねえ」

乱れた白髪をかき上げながら、老人は語りかける。そして、彼をまじまじと見つめはじめた。好奇じみた視線を何となく気恥ずかしく思ったのか、彼は顔を背けた。

「まあ、そんな恥ずかしがりなさんな。お前さんを見ていると、幼かったあの日々を思い出すのだよ——ちようどお前さんくらいの頃を。ああ、あんなこともあった、こんなこともあった、と止めどなく」

老人は優しく微笑んで、彼の頭をそつとなでた。

「これも何かの縁だ。どうかこの年寄りの昔話をひとつ聞いてやってくれまいか……」

『愛こそはすべて』、か……。なんと力強い言葉なのだろう。なんと美しい言葉なのだろう。私にもそんな世界があった、「力強く美しい世界」が。

ちやうど今日みたいな暖かな日だったよ。初めて隣町に繰り出した日。初めて制服をまとった日。そして初めて彼女と出会った日。

隣の席だつていうのに、初めて会ったときから彼女は目も合わせず、挨拶もせず。それどころか、教室の誰とも話すことすらしなかった。そう、男とも女とも。まさにひとりきりだ。そして、授業のときも、休みのときも、四六時中眠そうにしていた。

いつもひとりぼっちであくびをしていた、そんな彼女のことを私はひそかにエリナー・リグビーと呼んでいた。

何故つて？ あのととき入れ込んでいたバンドの唄で、どうしようもなく孤独な女^{こじき}乞食と神父のことを唄ったのがあつた。女乞食は結婚式の後の教会に来て、米粒を拾う。その神父は誰もあがたがらない説教を黙々と綴^{つづ}る毎を送る。女乞食は米粒目当てにしか教会にこないし、神父はそんな彼女を救おうともしない。

教会の中で女乞食は飢え死んで、その亡骸^{なきがら}を神父は嫌々埋葬するんだ。酷い話だろう？

そんな唄だ。それで、その女乞食の名前がエリナー・リグビーだったからさ。ちなみに、神父の名前はマッケンジーだったな。

『あの孤独な人々^{At the only people} 彼らの居場所はどこにあるのだろうか？』

びったりじゃないか——子どもらしい安い発想かもしれないけれど。

私は隣のエリナーをいつも好奇の目で見ていた。もつとだろう、あまり知らない隣町の出身の上に、ちよつと変わった子だったから。それに、授業中に突っ伏している彼女の耳元にこつそり定規を落としたりすると、それがもう傑作で。びっくり、と耳やら口元やらが引きつるんだ。それがもう滑稽^{こっげ}で滑稽でたまらなかつた。でも悪意はなくて、純粹に面白かつたんだ——もつとも、それは子どもらしい残酷さの発露^{はつろ}だったのかもしれないが。

しばらくはエリナーのことを観察しつつ、日々が過ぎていった。

ある日のことだつた。

「その君！」

怒声が教室にこだまする。ばね仕掛けでもされているかのように、エリナーは頭を上げた。いくつもの冷ややかな視線が彼女に向かつてくる。

意地悪くも、数学の教師が彼女を指名したんだ。

「 $3x+5y=11$ の等式の項はなんだね？」

ずっと眠りかけてばかりいた彼女のことだ。たとえどんな簡単な問題であつたにしろ、答えられないことは火を見るよ

りも明らかだった。そして、この数学教師はそれを知って指名している——私はそう確信した。

私はこの教師にささやかな反感を抱いた。そして、必死で教科書をめくっている彼女にわずばかりの同情を感じた。

私はノートの端に「3x 5y 11」と書き留めると、教師に見つからぬよう素早く隣の机に差し出した。

エリナーは眼を見開いてこちらを向いた。一瞬だったが、その表情にはとても信じられぬ、という驚嘆の念が浮かび上がっていた。

「3x, 5y, 11です……」

か細い声で彼女が答えると、今度は教師の方が目を丸くした。奴が敗北したのを見て、私は内心してやったり、といい気分になった。勝利の表情が顔に出るのを抑えるのがなかなか辛かったがね。

授業が終わり、十分間の休み時間がやって来た。束の間の時間だが、この十分がたまらなく楽しいんだ。お前さんなら分かるだろう？

同じ町出身の連中に加えて、新しく出来た隣の友人。以前より増えた仲間たちと喋りに行こうと、私は席を立とうとした。そのときだった。

「あの……さつきはありがとう」

隣の席から消え入りそうな声が聞こえたんだ。うつむきがちになりながら、どこか怯えた表情をみせつつ、エリナーがこちらを向いていた。

いや。あの教師がムカついたからだよ。

ただの気まぐれさ。ほっといてくれ。

……などとは言えなかった。そう言えたらどんなに恰好良かっただろう。

「あ、うん、ああ」

と予想外の出来事に、情けなく口をもごつかせることしか出来なかった。そんな様子の私を見て、彼女の口元が少しだけ緩んだように見えた。

「……あなた、きつといい人ね。そんな気がするわ」

むしろ、私は自分のことをひねくれ者だと思っていた——恐らくこれは子どもにありがちな思い込みであろうが。世間を知らない子どもは自己を悪く評価しがちだ。対して世間を知る大人は、どういうわけかどんなくでもない無能者でも、いやそうであるほど自分が正しいと往々にして思いたがる、というのはある種の愉快な皮肉だとは思わんかね。もちろん私の見当違いかもしれないが。

ともかく、私は自分のことを「いい人」であるとは思っていなかった。にもかかわらず、よりにもよってエリナーに突然いい人などと褒められたものだから、一層面食らってしまった

たのである。

言うべき言葉が見つからず、私は薄笑いを繕つくろいつつ途方にくれていた。彼女は顔を上げて、そんな私に微笑みかけた。このとき、私は彼女の顔をはつきりと見た。お世辞にも整った、とは言えない顔立ちであったが、しかし透き通った大きな瞳と、穏やかな笑みが一瞬のうちに私の頭にこびり付いた。「あなたとなら、ここが楽しく思えてきそう。何故だかそう思うの」

思えば、これがエリナーとの最初の会話だった。

その日から、私とエリナーは単なる隣人ではなくなつた。朝一番から挨拶を交わし、昼間には取り留めもないことで笑い合い、夕暮れには一日の終わりを惜しみつつ別れを告げる、次第にそんな仲になつていった。

相変わらず彼女は誰とも関わりを持たなかつたが、私とだけは別だった。他の連中には分かるまい。だが、彼女が変わつていくのが私にははつきりと分かつた。

休み時間は、もっぱら私とのお喋りに充てるようになった。どんなことを話していたのか、今となつてはその切れ端すら思い出せないが、話をしてするときの彼女の笑顔だけははっ

きりと覚えていゝる。それに、私もそのときはかつて仲間たちと喋るときと同じか、いやそれ以上に楽しそうな様子であつたに違いない。彼女と過ごす時間が長くなつたこともあつて、彼らと話すことはなくなつていったが、そんなことはどうでもよかつた。

それどころか授業のときも、どこか楽しそうな様子になつた。依然として数学は苦手のようだったが、分らない問題があるといつても私に尋ねてきた。私も不思議と鬱陶うつとうしいとは思わなかつた。それどころか、もつと教えてやりたいときえ思つていた——彼女と話す口実が欲しかつただけ、というのは言うまでもないだろう。

それに、不合格続きだつた定期的に行われる小試験も、いつしか満点に近い点数が取れるようになっていく。そのたびに、

「ありがとう、あなたのおかげよ」

と言つてくれるのが常だつた。そのたつた一言のために、給食、体育祭、文化祭、学校でのあらゆる出来事を差し置いて、小試験が行われるのを一番心待ちにしてた私がいゝた。

分かるだろう。私もまた、エリナーと同じく変わつていったんだ。彼女を見る好奇の目が、好意の視線にみるみるうちに変貌していくのが、否が応でも分かつた。

身勝手なものだ——彼女を小馬鹿にしてたのが、打つて

変わって今度は彼女に好意を抱いている。けれど、私はそんなことを気にも留めなかった。ただただ膨れ上がっていき想いを、膨れ上がるがままに任せた。そして、彼女もまた私をどこまでも純粹に慕したってくれた。

彼女は私の救世主に、私は彼女の救世主になった。

ここに来て、私は大いなる着想を得た。

この想いこそが、あまねく人々が口にする「愛love」なのだ。

「愛」がある限り、私と彼女は永遠に幸せでいられる。「愛」が私と彼女の生きる世界の真理なのだ。

私に大革命が起きたんだ。私は目を覚まし、「愛」という真実に向かって力強く歩みを進めている真つ最中。背後で列なした楽隊が奏でるラ・マルセイエーズに合わせて、興奮と恍惚うろたのなかで行進するだけだ。

そう、まさしく『愛こそはすべて』。

信じて疑わなかった。

彼女との日々はゆつくりと、しかし確かに流れていった。長い休みが終わって、暑さが涼しさに変わって、涼しさが少しずつ辛く感じはじめる頃。ちょっとした事件が起こった。体育の時間にエリナーが倒れたというのだ。

給食も食わずに、私は保健室に飛んでいった。あまりの慌てぶりに驚いたのだろう、凄まじい音を立てて開け放たれた扉を、その無礼を咎とがめることもなく、保健医は呆然ぼうぜんと見つめていた。

果たして、白いカーテンで仕切られた空間に、彼女はひとりきりで横たわっていた。

「あ……来てくれたのね」

彼女はうつすらと笑みを浮かべたが、どこか疲れた色がその顔にはあった。

「心配しないで。ちょっと眠たくなってしまっただけだから……。立ったまま眠ってしまったなんてお馬鹿さんよね、私」

えへへ、と冗談めかす彼女の瞳の下には、黒いくまが出来ていた。別段色白というわけでもないのに、はつきりとそれが見て取れたのだ。

彼女の思惑とは裏腹に、不安の表情が出てしまったのだろうか。細やかな手を差し伸べて、私の手にそつと触れた。

「教室に戻らないと。給食の時間でしよう。男の子はたくさん食べないといけないからね」

手を重ねても、私の心は少しも安らぐことはなかった。倒れたときに擦りむいたのであろう傷に、申し訳程度の手当て。絆創膏ばんそうこうだらけの彼女の手はごわごわしていた。

しかし、それより気にかかったのは彼女の指にいくつもの

あかぎれがあったことだった。皮膚が裂け、赤い肉が覗く。それが指という指に深々と刻まれていた。これまで気付かなかったが、何故こんなに。そのおぞましい傷に、私は痛み以上の何かを見た気がした。

「おい」

背後から野太い声が出た。声の主は、担任の教師だった。

「こんなところで何をしている。給食時間中に勝手に抜け出していいと誰が言った」

教師は偉ぶって言い放つと、私の手を強引に引っ張っていった。別れを告げる間もなく、私とエリナーは引き離されてしまったのだ。

教室の扉がいつもより重く感じる。何とか開けて足を踏み入れると、給食を食べていた生徒たちが一斉にこちらを見た。このとき、どうしたことか私は凄まじい居心地の悪さを覚えた。

まるで、教室にいる人間一人ひとりの眼に、軽蔑と嘲笑の念が宿っているようだった。話しかけてくる者は誰もいない。いつもエリナーと話していたから、他の生徒たちとの関わりは薄くなっても仕方ないだろう。しかし、そうではなかった。わざと私を避けているように思えたのだ。

——ひとりきりで食べる給食の味は恐ろしくむなし。机

に突っ伏して過ごしたひとりきりの休み時間は驚くほどつまらない。授業の内容は昼下がりの頭には全く入ってこない——ようやく下校の時間になって学校から解放され、あの不可解な居心地の悪さについてあれこれ思案した。が、その正体は皆目見当もつかない。

代わりに、自分にとってエリナーの存在がいかに大きいかを、改めて思い知らされたのだ。

結局、その日は「やっぱりエリナーが好きだ」に落ち着いて、ひとり家路についた。

いや、帰るときはいつもひとりだったか。なのに、いつもよりひとりきりに感じたのだった。

北風が吹いては、鮮やかだった葉々を容赦なくさらっていくのを見るたび、得体の知れない哀しみを覚える頃。

私の前でこそ何とか明るく振る舞っていたエリナーだったが、寒さが深まっていくにつれ、勉強で頭を抱えることが多くなるにつれ、ますます彼女が疲弊していくのが手に取るように分かった。

くすんだ顔色で懸命に微笑む彼女を、見ているしかなかった。美しく透き通っていた瞳は、どこか濁りはじめていた。

鉛筆を握る指に刻まれた傷は醜く広がり、声なき声を訴えているように思えた。

小試験も不合格が続くようになった。

「ごめんなさい。あなたに教えてもらったことが無駄になってしまったわ」

と申し訳なきように謝るのを見て、小試験が心底嫌いになつてしまった。

それでも、私はそのわけを尋ねることが出来なかった。今となつては何故尋ねなかったのか全く分からない——恰好悪いとか、恥ずかしいだとか、そんな下らない理由からだったんだろう。

ただただ、彼女が擦り切れていくのを見過ごしているしかなかった。

粉雪がぱらつくある週末の日、私は自転車に乗ってエリナーの住む隣町へ出かけた。直接は聞けなかったけれど、彼女の住む町へ行けば何か分かるかもしれない、と漠然と思つたら——子どもらしい発想だよ。

町中を見て回って見たけれど、当然得るものは何もなかった。後から考えてみれば、そんなこと分かり切つたことだつ

たけれど。ただ、彼女も私と同じような町に住んでいるんだなあ、と阿呆^{あほう}みたいなことを感じただけだった。

せめてもの慰めといつて、ちよつと高めの棒付きの飴^{あめ}を買つて帰ろうとしたときだった。少し先の街角から、なにやら感情的な叫び声が聞こえた。何も収穫はなかったんだ。どうせなら土産話のひとつでも。ちよつとした好奇心と野次馬根性で、声のする方へ行つてみることにした。

そこには、女の人が数人の子どもを引き連れて立っていた。

母親は中年くらいだろうか。無残に乱れた灰色の髪から、長年の苦勞が垣間見える。子どもは皆まだ幼かった。最年長でも私と同じ年くらいであろう。父親らしき人はいなかった。きつといつもは母親が朝から晩まで働いて、家と子どもたちの世話は一番上の女の子がやっているのかな……と子どもながらに想像した。

毛玉だらけのほつれたセーターを着た子どもたちは、互いに肩を寄せ合つて震えている。寒さからか、あるいは羞恥^{しゆうち}からか、皆うつむいてはつきりと顔は見えない。

もつと酷いのは母親の方だ。つきはぎだらけの洋服だけを身に付け、雪交じりの寒風に晒^{さら}されていた。それでも負けじと、彼女は声を張り上げる。

「あと三百円あれば灯油が買えます！ 三百円あればこの子

たちが凍えずにすむのです！ だからどうか……！」

人々は足早に立ち去っていくばかりだった。外套がいのうの襟えりを手で押さえながら、一刻も早くと家へと急いでいく——ストーブがきいている部屋は、こことは比べ物にならないほど暖かいのだろう。

彼女らのことを見て、嘲あざわらり交じりの表情を浮かべる者もいた。自分よりも下を見て、蔑み迫害する人間は世の中には少なからず存在する。いや、むしろそういう人間の方が多いのかもしれない、と年老いた今はそう思えてならない。ともかくそうした連中にとって、彼女らは恰好の餌食えじきであったに違いないあるまい。

何人にも届かぬ叫びは吹き荒すさぶ風音と交じって、やがてかき消されていった。それでも、この母親は一縷いちるの望みをかけて道行く老若男女に頭を下げ続ける。もはや一縷の望みさえないと分かっていたのかもしれない。ただ冷淡と嘲笑を一身に引き受けていた。

その様子を、私は飴を舐めながら遠巻きに眺めていた。人目もはばかりらず町中で頭こがへを垂れ続ける母親を見て、ああ惨めだなあと同情するとともに、あんなとこの子どもに生まれなくてよかった、と安堵あんどした。

私には百円ばかりのお駄賃があった。それを分け与えてや

れば少なくとも足しにはなるはずだったが、その気にはなれなかった。それもそうだ、これだけあればあと何本かは飴が買える。他人の灯油よりも、自分の飴の方が大事に決まっているだろう。

あの家族を笑うほど私は弱くなかったが、救ってやるほど強くはなかった。

ただ、同年代であろう一番上の女の子がどんな子なのか少しだけ気になった。もちろん、その子を励ましてやろうとか、友達になつてあげようとか、そういうことじゃない。ただの好奇心だ。私はポケットの中の百円玉を強く握りしめると、自転車をひいてあの家族へ近づこうとした。

そのときだった。一段と強い突風が、彼女の前髪を吹き飛ばした。

私は確かに見た。見覚えのある大きな瞳を。もはや輝きは全く失われていたが、間違いない。見間違えるはずがない。毎日のように見つめていたのだから。

私は確かに理解した。どうしてエリナーが皆と関わろうとしなかったのか。どうして答えを教えただけで私をあんなに慕うようになったのか。どうして体育中にも関わらず倒れたのか。どうして指にいくつもあかぎれがあったのか。どうして私があのととき不可解な居心地の悪さを覚えたのか。どう

して皆がエリナーと関わりとうとしなかったのか。どうして——。全部分かった。

気付けば、私は自転車に飛び乗っていた。彼女の町から今すぐにも逃げ出したかった。いや、彼女から逃げ出したかったのか。落ち葉を蹴散らし、雪を踏みつけ家にたどり着いたときには、泥と擦り傷だらけになっていた。雪で滑って転んでしまったのだとだけ告げると、夕食も摂らずに布団にくるまった。明日、学校に行かねばならないという動かぬ事実には震えていた。

その夜は大雪になったようだった。

白く閉ざされた道が朝日を照り返しているのを見て、私は息をついた。これで学校に行かずにすむのだ、と。

今日は一段と寒いねえ、と両親が話している。家の中からは、かすかに灯油のにおいがした。

積もった雪は、おおかたあつけなく一日で融けた。

翌朝には、学校へと続く道は広く開けていた。

誰が作ったのであろう、向かいの家のそばに私の背丈ほどの雪だるまが鎮座していた。その顔は、どこか無邪気な歓喜

の色を湛えているように見える。

その表情に、どういふわけか私は底知れぬ苛立ちを覚えた。ちようど足元に転がっていた太めの枝きれを拾い上げ、雪だるまに歩み寄る。

手にした枝きれを振りかざし、その面を滅茶苦茶に打ち据えた。ささくれ立った無骨な樹皮が雪だるまの顔を荒々しく削り取る。腕を振り上げるたびに、顔をなしていた雪がはじけ飛んでは痛ましい傷が刻まれていく。折れた木の鼻。片方がこぼれ落ちた石の眼。もはや見分けがつかなくなった口の窪み。文字通り完膚なきまで叩きのめされ、雪だるまは見るも無残な醜い風貌に変わってしまった。

だが、何故だか破壊への欲動は満たされなかった。ふっと糸が切れたように、疲労が堰を切って押し寄せる。そして、これまでに感じたことのないほどの喪失感が私を襲った。私のなかで、これまで持っていた何かが失われてしまったようだ——散々弄んだ雪だるまを呆然と眺めながら、そう直感した。

雪だるまも、冷たい隻眼でこちらを虚ろに見返していた。

二十分か、三十分か。我に返ったときには、それなりの時間が経ってしまっていた。私は雪だるまに踵を返し、自転車で乗ってぬかるむ道へときざ出した。

雪解けの泥が車輪をとらえ、学校への歩みを遅くする。たどり着いたのは始業十分ほど前であった。

エリナーは、私の隣の席で突っ伏していた。

物音を立てぬよう、静かに椅子を引く。しかし、思惑に反して、鈍い音が鳴った。机の脚と椅子が当たったらしい。ぴくり、彼女の耳が動いた。

「おはよう、一昨日はすごい雪だったね。大丈夫だった？」

彼女は青白く微笑んだ。風邪ひいてないかしら、と気遣う彼女の声はしわがれ、時折咳らしきものが混じっていた。

私は押し黙った。始業間際の騒がしさのなか、ただ教室の片隅だけ静寂が支配していた。彼女の瞳から笑みが失われていく。

——どうして——

黙した彼女の問いに、私は答えられなかった。彼女の声が、私の心に届かなかった。彼女の瞳から、私は眼を背けた。

それきり、言葉を交わすことはなかった。まるでエリナーなど存在していないように、私は振る舞った。彼女は一日中、顔をうずめるようにして机に伏せていた。時折、隣から何かを訴えかける視線が投げかけられたが、構わぬように努めた。

これまでに過ごしたことがないような長い長い一日だった。

それでも、時というものは我々のあずかり知らぬところで流れていくものなのだろう。午後四時には、沈みゆく夕陽と終業の鐘が、一日の終わりの訪れを告げていた。

机の中の教科書を手早く鞆に押し込んで席を立とうとするど、あることに気が付いた。エリナーがいないのだ。いつの間にか帰ってしまったのだろう。

とろい彼女のことだ。要らない教科書まで持ってきては、いつもわたわたと鞆に詰め込んで。私の方は私の方で、そんな彼女をいつまでも待っていたつけ。そしてしばらくすると、はち切れそうなほどに膨らんだ鞆を背負いこんだ彼女は私に呼び掛けるのだ。どこか困ったような、はにかんだ笑顔で。

——ごめんね、待たせちゃったね

……じゃあ、行こうか——

空つぼの隣席を眺めると、そんな記憶がふと思いつき出された。

思えば、彼女と一日の始めに会うのは、いつもここだった。学校のある町に住んでいるという彼女は、だいたい私よりはやく教室にいた。まだ昨夜の余韻が抜けきらない彼女に声をかけると、少し眠たげな声で挨拶を返すのだった。そして、今朝は珍しい小鳥がいたよ、道端に可愛い花が咲いていたよ、と懸命に話しかけてくるのだ。

彼女と昼食を共にしていたのも、いつもここだった。他の連中が好き勝手に席を離れて思い思いの場所で食べているなかで、彼女と私は自分の席を離れようとせず。やれこの卵焼きが美味しいだの、やれこの牛乳が不味いだの、そんなことばかりをいいあっていた。

彼女と休みを過ごしたのも、いつもここだった。皆が外で球技やら鬼ごっこやらをやっている中、彼女と私はいつもここにいた。取るに足らない話が、ここで延々と繰り返されてきた。たまたま睡魔に負けてまどろんでしまった彼女の寝顔を、鐘が鳴って掃除が始まるまで飽きもせず眺めていたことも。

そう、彼女とともにいたのは、いつもここだった。あの粗野な担任教師は面倒がって席替えをしなかった。ゆえに、彼女と私は出会うから今日に至るまでずっとここにいたのだ。びたりと、寸分の隙間もなくくっついた二つの机がそのあかしだ。今日まで、彼女と私は確かにここに存在していた。

浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。不意に溢れ出した、これまでの思い出。つい三日前まで、当たり前のようにあった思い出。

そのかけらを拾い上げているうちに、いつしか教室には私しかいなくなっていた。もう誰もいなくなってしまった。た

だ、私ひとりが夕焼けに照らされているのみだ。

「……下らない」

誰に言うともなく、私は呟いた。

その通りだ。下らない、つまらない、とりとめもない、そんな出来事ばかりだ。なのに、その下らない思い出が次から次へと、押し留めようもなくこぼれ落ちてくるのは何故だろう。

茜色に染まった置いてきぼりの教室を後にして、私は帰途についた。いつもと同じ、ひとりきりの道だ。ひとりきりの長く曲がりくねった道を足元に確かめて、いつも通りの家路を辿った。

あの雪だるまは、とっくに融けてなくなっていた。残骸すら残さずに、消えてなくなった。

次の日から、エリナーは私の隣から姿を消した。彼女と会うことは二度となかった。

私の周りには再び人が集まり、騒がしさが訪れた。休み時間、かつての仲間たちと過ごすようになった。誰かに勉強を教えることもなくなった。あの得体の知れない居心地の悪

さを覚えることもなくなった。

彼女が去った後の教室は、入学したての頃に戻ったのだ。誰もエリナーのことなど気にも留めない様子だった。最初からそんな奴はいなかったのだ、とばかりに。

これでよかった。全て元通りだ。あの日々は、まぼろしだったのだ。きつと今朝の夢の残りかすがこびり付いているだけなのだ。

しかし、誰もいない隣席を見るたびにあの記憶は夢でも何でもない、他ならぬ、否定の余地もない「現実」だったことを思い知らされた。

そして、私が彼女に対して行った、揺るぎようのない「現実」も。

それなのに、彼女がいらないということに心のどこかで安堵する私がいちたのもまた「現実」だった。それに気付くにつけ、途方もなく巨大な絶望が押し寄せては未熟な心を容赦なく押しつぶすのだ。

私が夢見た空中楼阁は、無残に崩壊した。私が思い描いていた「世界」は、全くの蜃気楼だったのだ。遠いあの日々、確かに見えていた薔薇色の光景は、色褪せた失望の霧となつて指の隙間からすり抜けていった。そこにはただ「現実」のみが静かに佇んでいたのである。

「愛」の力など、結局はそんなものだ、全くの無力なのだ——世の冷笑主義者が宣うような、そんな大それたことを言うつもりはない。

ただ、彼女にとつて、私は救世主などではなかった。否みようもなく、私はユダだった。

ただ、私はエリナー・リグビーを救えなかった。所詮、私はマッケンジー神父でしかなかったのだ。

ただ、私は桃源郷の住人ではなかった。虚構の世界に酔っていただけなのだ。

それだけのことだ。たったそれだけのことが、私の心を確実に蝕んでいった。

束の間に時は流れ、私は年を重ねていった。

恋愛をし、結婚をし、子をなした。きわめて変哲のない、何不自由ないふつうの人生を送っていったつもりだった。

だが、事あるごとにあの忌まわしき思い出が蘇つては私を苛んだ。

決して外れぬ私の心のくびきとなったのだ。彼女の存在が、いや彼女を見捨てた私の存在そのものが。

夏の果てのある日。私は軒下で涼をとりつつ虫の音に耳を傾けていた。

穏やかな涼風と、どこか哀しげな響きに、思わずうつらうつらとしていたとき。それまで心地よく響いていた鳴き声が段々と大きくなり、ついに鼓膜を引きちぎらんばかりの金切り声に変貌したのだ。

けたたましく心をつんざく壮絶な叫びは、その全てが私を責め立てているかのように響き渡る。

頭の中を縦横無尽に駆け巡る叫喚きょうかんに、私は恐れおののいた。同時に、抑えがたい衝動に駆られる。

あらん限りの声を振り絞って、私は叫び返した。こちらも叫んで、聞こえてくる叫び声をかき消そうとしたのだ。言葉にならない喉の軋みきしみが、夜闇を切り裂いた。

どれほど叫び続けたらうか。

気が付けば、妻子が恐怖の表情を浮かべてこちらを見つめていた。

もとより、叫んでいたのは私だけだった。

——心の奥底に眠る苦悶くもんが、声なき絶叫となって私を貫くのだ。

こうした苦悩に直面するたび、私は自身に言い聞かせた。

仕方なかったのだ。あのままだったら、きっと私も迫害の対象になったに違いない。エリナーに寄り添い続けたとて、何の得があっただろうか？ それどころか、あの一家の様子を見るに、今後の人生の足かせになったのかもしれないのに。そうだ、人生には時に非情な決断を迫られることもある。あれが最も正しい選択だったんだ、と。

そうすることで、ほんのいつときだけ私の中の叫びが鎮まり、少しだけ心が安らいだ。

しかし、いくら自分が正しいと思い込んだところで、それが何になる？ 彼女を見捨てたという「現実」が、泰山たいざんのごとく目の前に立ちはだかっていることには何の変わりもないのだから……！

あの恐るべき叫び声は何度でも、思わぬときに私の内側からほとばしる。決して解放されることのない責め苦となって、この脆ぜい弱な精神を喰らい尽くしていくのだ。

そうと分かっているながら私は自身を欺き、眼前の「現実」に対して不誠実であり続けた。

とうに分かっていた。あの穢けがれなき「力強く美しい世界」での日々には未来永劫えいごう、戻れないのだと。

そしてこれからの生涯の一切を、この「現実」という果てしなく続く不毛の地で過ごすほかないのだということ。

彼女を見放したあるとき、私は理想郷から追放されたのだ。

私は墮天した。

地を這いずりまわるほかなかった。

この受け入れがたい運命を、どうしようもなく受け入れねばならなかったのだ。

そうと悟ったのは。

そう、ちやうど今日みたいな凍てつく日だったよ――

そのとき、突如として一陣の風が吹き荒れ、彼の視界にある全てをさらっていった。

しばらくして平穏と静寂が戻ったときには、目の前の老人は跡形もなく消え去っていた。

いずこへ行ってしまったのか。あたりを見渡しても、もうどこにもいなかった。

……そうか。

そうだったのか。

まさしく、そうだった。

彼は小さく呟いた。

だらしなく垂れた白髪をかき上げてもなお、映るもの全てはぼやけて見える。目をこすってみても、曇ったまま晴れることはなかった。わずかに濡れた指を古ぼけた外套で拭いて、彼は固く冷たいハンドルを握った。

頭上では灰色のビルの林が彼を冷たく見下ろし。眼前には黒々としたアスファルトの道がどこまでも続く。

身を切るような寒さのせいだろうか。彼は青黒い唇を震わせた。嗚咽とも慟哭ともつかぬ唄が、赤茶けた空に吸い込まれていく。

——今でも思い出す場所がある

この生涯のなかで
いくつかは見る影もなくなってしまった――

錆だらけの自転車は、壊れそうに軋みながらゆっくりと彼を運んでいく。

今まさに没せんとする、遙かな黄昏の地平線に向かって。